

さ い き じょう か まち い せき
佐伯城下町遺跡

松下家屋敷跡
浅沢家屋敷跡

平成23・24年度大手前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2023

佐伯市教育委員会

さ い き じょう か まち い せき
佐伯城下町遺跡

松下家屋敷跡
浅沢家屋敷跡

平成23・24年度大手前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2023

佐伯市教育委員会



佐伯城下町空中写真

序 文

本書は平成23年度～24年度に実施した、江戸時代に佐伯藩毛利家が治めた佐伯城下町の発掘調査の成果をまとめたものです。

調査地は現在のさいき城山桜ホールの周辺に該当し、大手前地区再開発のための土地区画整理に伴って発掘調査を実施しました。調査の結果、屋敷地内の溝や蔵の跡と思われる基礎などの遺構と、江戸時代から現代に至るまでの遺物を確認することができました。

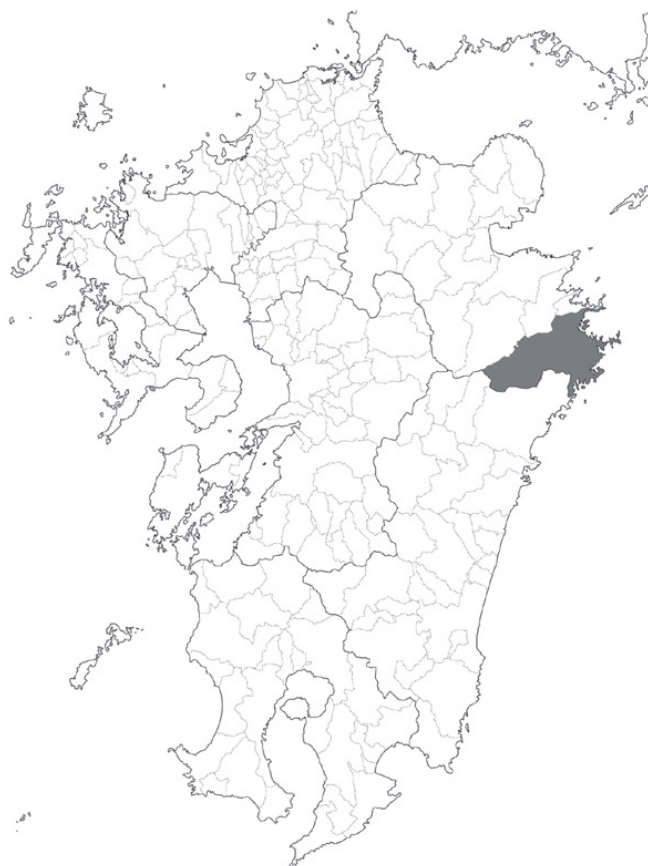
調査地周辺は、毛利家に仕えていた中～下級藩士が住んでいた武家屋敷地です。調査区は家格の高い藩士の屋敷地に隣接し、町人地にも近く、近代以降も住宅や店舗が立ち並ぶ佐伯の中心地でした。今回の調査成果は、こうした佐伯の賑わいを垣間見ることができるものと言えるでしょう。

また、佐伯城下町は江戸時代を通じて大規模な火災による被害を何度も受けています。佐伯藩は、そのたびに城下町の復興を行い、そのうち幾度かは町割りの再編にも取り組みました。今回の松下家・浅沢家屋敷跡の調査では、このような城下町の再編をうかがわせる成果も見つかりました。江戸時代の都市計画と、城下町の変遷についての理解が深まることが期待されます。

最後になりましたが、今回の調査では関係各位に多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

佐伯市教育委員会
教育長 宗岡 功



例言・凡例

- 本書は、平成23年から24年度にかけて実施した、大手前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 調査・整理作業は佐伯市教育委員会 福田聡・五十川慎也・福永素久が行った。
- 本書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
- 調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。
- 本書の編集・執筆は福永が行った。
- 発掘調査における実測図作成・写真撮影は福田・五十川が行った。
- 報告書作成における遺物実測・遺構配置図を含むトレースは福永が行った。
- 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号と一致する。
- 挿図の縮尺は、図ごとに示した。
- 和暦は、各節の初出のものに対応する西暦を（ ）書きで示し、以降は適宜省略した。
- 浅沢家の「沢」の字については、本来ならば旧字体の「澤」であるが、本文中においては現在使用されている常用漢字である「沢」の字を使用した。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 地理的・歴史的環境	3
第2章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 松下家屋敷跡の調査	9
第3節 浅沢家屋敷跡の調査	12
第4節 調査のまとめ	16
第3章 まとめ	17
第1節 屋敷地の変遷	17
第2節 総括	19
図版	23

挿図目次

第1図	周辺遺跡地図 (S=1/50,000)	5
第2図	発掘調査地周辺地図 (S=1/5,000)	6
第3図	文政9年(1826)「御城下分見明細図絵」(部分)	6
第4図	調査区全体図 (S=1/2,000)	8
第5図	基本層序模式図	8
第6図	松下家屋敷跡遺構配置図 (S= 1 /200)	10
第7図	松下家屋敷跡出土遺物実測図 (S=1/3)	11
第8図	浅沢家屋敷跡遺構配置図 (S=1/200)	13
第9図	浅沢家屋敷跡出土遺物実測図① (S=1/3)	14
第10図	浅沢家屋敷跡出土遺物実測図② (S=1/3)	15
第11図A	元文3年(1738)作成「御城并御城下絵図」	18
第11図B	文政9年(1826)作成「御城下分見明細図絵」	18
第11図C	明治4年(1871)頃「佐伯藩時代屋敷図」	19
第12図	S80出土軒平瓦分類表 (S= 1 /4)	20

表 目 次

第1表	松下家屋敷跡出土遺物観察表	12
第2表	浅沢家屋敷跡出土遺物観察表	15

図版目次

図版1	23
松下家屋敷跡遠景 (北から)	
松下家屋敷跡近景 (南から)	
図版2	24
S80 検出状況 (東から)	
松下家屋敷跡出土遺物 (第7図)	
図版3	25
浅沢家屋敷跡遠景 (西から)	
浅沢家屋敷跡近景 (南から)	
図版4	26
S1 検出状況 (南から)	
浅沢家屋敷跡出土遺物 (第9・10図)	

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

平成17年（2005）の合併により誕生した佐伯市は、合併当時は約8万人規模の人口を有していたが、その後は人口減少が続き、平成22年（2010）には約7万7千人に減少、令和4年12月末現在では約6万7千人まで減少している。また江戸時代から戦後まで佐伯市内で一番の賑わいを見せていた大手前地区を中心とする市街地は、平成に入って以降、郊外の大規模店舗の出店などにより、集客が減少し商店街には空き店舗が増加した。一方で、大手前地区は市街地と市内外各地を結ぶバスターミナルがある公共交通機関の拠点であり、なお交通の要衝としての機能が維持されていた。

そこで佐伯市はこのような社会情勢を踏まえつつ、「人が集う街」の実現を目標として、新たな「佐伯市中心市街地活性化基本計画」を平成22年（2010）に策定した。

今回の調査は、基本計画の中核に位置付けられる、大手前再開発事業基本計画に基づく再開発に伴うものである。平成22年時点では大手前地区の再開発により店舗や住宅、地域交流センター、広場、バスターミナル等からなる複合施設を整備する事業計画であり、その対象となった範囲に対して確認調査を実施したところ、一部で近世の遺構・遺物を含む遺跡が確認されたため、発掘調査を行った。

発掘調査は、平成24年（2012）2月20日から9月19日にかけて実施した。調査区は文政9年（1826）の「御城下分見明細図絵」（佐伯市歴史資料館所蔵）によると、中～下級クラスの武家屋敷地で、南北に伸びる「新道小路」を挟んで東側の浅沢家屋敷、西側の松下家屋敷にあたる箇所である。

調査の結果、井戸枠として使われた石組みや溝状遺構を検出し、遺物も陶磁器片を中心に大量に出土した。その大半は明治以降のものであり、近代以降も屋敷地が人々に利用されていたことがうかがえた。近世に遡る主な成果としては、松下家屋敷跡の調査では18世紀後期頃の陶磁器や瓦が集中する、瓦溜り土坑などが検出された。

ところが発掘調査の終了後、「大手前再開発事業基本計画」に基づく整備が行われる予定であったが、事業の進行に伴う計画変更に関して市民からの反対意見が多数寄せられ、再開発事業は凍結されることとなった。この事態を受けて、佐伯市は地域住民との合意形成を重視し、大手前地区をまちの中心として様々な人々が交流し、にぎわいを生み出す拠点とすることなどを目的とした「大手前開発基本計画」を平成27年度（2015）に策定。事業の再出発を図った。

この新たな「大手前開発基本計画」においても、対象範囲は平成22年時点の計画と変わるものではなかったが、本計画にもとづく確認調査を複数回実施した。いくつかの地点では近世の遺構・遺物を検出したが、開発との調整により本調査に至ったものは無い。それぞれの確認調査の結果については『佐伯市遺跡試掘確認調査報告書』（佐伯市教育委員会2022a）を参照されたい。

結果として、これらの調査の終了後または一部並行して大手前地区の再開発は進み、平成30年（2018）に情報発信施設と新たなバスターミナル、令和2年（2020）にさいき城山桜ホール、大手前広場が完成し、あらたな佐伯市の顔となって市街地活性化への期待を担っている。

第2節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

【調査主体】

佐伯市教育委員会

教育長 分藤 高嗣（平成23・24年度）

宗岡 功（令和4年度）

教育部長 福泉 慶一郎（平成23・24年度）

渡邊 和彦（令和4年度）

【調査事務】

佐伯市教育委員会文化振興課文化振興係（平成23年度）

社会教育課文化振興係（平成24年度）

文化財係（令和4年度）

課長 河野 宜弘（平成23年度）

福島 裕子（平成24年度）

宮田 耕一（令和4年度）

参事 吉武 牧子（令和4年度）

課長補佐兼係長 今山 勝博（平成23・24年度）

総括主幹 橋本 紀昭（令和4年度）

主幹兼係長 古賀 慎司（平成23・24年度）

吉武 牧子（平成24年度）

副主幹 福田 聡（令和4年度）

主任 福田 聡（平成23・24年度）

嘱託職員 五十川 慎也（平成23・24年度）

会計年度任用職員 福永 素久（令和4年度）

第3節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】

佐伯市は大分県南端に位置する人口67,126人（令和4年12月末現在）の自治体である。市は平成17年（2005）に、旧市域と旧南海部郡上浦町・弥生町・本匠村・宇目町・直川村・鶴見町・米水津村・蒲江町が合併した。合併したことで市域が北に津久見市と臼杵市、西に豊後大野市、南に宮崎県延岡市に接し、903.14km²の面積をもつ九州一広い市域を有する。

市域の西部は標高1,000m以上の山々が連なる九州山地の祖母傾国定公園を含み、東部は太平洋と豊後水道に面したりリアス海岸が日豊海岸国定公園の一部をなしている。市内には延長38kmに及ぶ一級河川番匠川が東流し、その水系に属する支流のほか、延岡市の五ヶ瀬川水系に含まれる河川によって小規模な盆地や段丘が形成されているが、大規模な平野は乏しい。現在市街地となっている平野部では、近世以降に番匠川の河口付近の低地や三角州を埋め立てて中心市街地を形成した。このような近世以降の開発の経緯を示す地名として、現在も市街地周辺には「島」が付く地名があり、近世以前は番匠川河口から佐伯湾に浮かぶ島があったことを示している。

このように、佐伯市の市域は大半を山林が占め、豊後水道に面する東部はリアス海岸が連なっている。また、清流で知られる番匠川が市域を横断するように東流し、河口部で沖積平野をなしている。そのため、番匠川の河口部に位置する佐伯城下町の発掘調査では、ほとんどの場合において最下部に砂層が検出される。また現在でも標高は2mほどしかなく、現地表面から1～1.5m程掘り下げると多量の地下水が湧き出す。

【歴史的環境】

現在までに発見されている遺跡からみれば、佐伯市内における旧石器・縄文時代の遺跡は山間部に分布し、海岸付近に遺跡が形成されるのは弥生時代になってからである。白濁遺跡において弥生時代後期頃の竪穴住居跡と貝塚が確認されている。古墳時代には、干潟に浮かぶ小島や、河口に向いた尾根に小規模な古墳が築かれている。東島古墳や女島山古墳群・檜野古墳などであり、調査成果からは、およそ5世紀頃には番匠川河口一帯を支配していた権力者の存在がうかがえる。

古代になると佐伯の地名が文献史料に登場するようになり、平安時代末頃には番匠川河口付近に拠点を持つ一族が佐伯氏を名乗り中世の佐伯を支配することになる。

佐伯氏は豊後大神氏の一族で、平安時代末頃には佐伯荘を経営していたことが資料から確認されている。彼らは番匠川や豊後水道で活動する水軍を擁し、梅牟礼山の周辺を拠点に活動していたと考えられる。16世紀前半には梅牟礼山頂に梅牟礼城を築き、その東麓には家臣団居住地を構え、古市遺跡を中心とする市場空間を取り囲むように寺社を配置した城下集落ができあがっていたと考えられる。こうした状況は、遺跡の分布状況や近年の発掘調査、地域に残る伝承などから徐々に明らかになってきている。

中世までの番匠川河口は、広い干潟に幾つかの小島が浮かんでいたと考えられる。八幡山（現城山）の山頂には緒方惟栄の創建という八幡社が建てられ、麓には塩屋千軒と呼ばれる製塩集落があったと伝えられている。これら番匠川河口の中世集落については発掘調査の事例はないが、近世城下町の出土遺物の中に中世末に遡る遺物がわずかに出土している（佐伯市教委1998・2015）。

慶長6年（1601）に入部した佐伯藩初代藩主毛利高政は、急峻に過ぎる梅牟礼城を廃し、新たな城と城下町を建設する。慶長7年（1602）から9年（1606）頃にかけて、八幡山頂にあった八幡社を北西麓に移して佐伯城を築城した。あわせてその南東に広がっていた集落と干潟を埋め立てて城下町とした。新たな城下町の一部には梅牟礼山麓から住民を移住させ、幾つかの寺院も移

築した。

城下町の構成は、佐伯城に最も近い山麓部を上級藩士の屋敷地、その周囲を武家地とし、南の番匠川に接する区域を船頭や水主の住む船頭町、東を商人や町人の住む内町とする。寺社を分散して配置し、番匠川を外堀、その支流を内堀として利用することで総構えの城下町とする都市計画を見ることができる。こうした城下町の形成は、火災や災害による再編を経て18世紀頃には完成したと見られる。城下町を基礎に発展した現在の佐伯市中心市街地には、当時の町割に由来する地名や通りの名称が残っている。

発掘調査対象となったのは、大手門から内堀を隔てた中～下級クラスの藩士の居住地である。調査区は文政9年（1826）の「御城下分見明細図絵」（佐伯市歴史資料館所蔵）によると、「新道小路」を挟んで西側の松下家屋敷と、東側の浅沢家屋敷が想定される（第3図・第3章第1節で詳述）。

周辺での主な発掘調査としては、天祐館跡と警露館跡、戸倉家屋敷跡と保田家屋敷跡がある。

天祐館は幕末に藩主の居宅として建築された御殿、警露館は明治中期に建築された旧藩主の邸宅である。建築物の基礎が残されており、地盤の状態によって基礎の施工方法を選択していたほか、かかる加重も想定していた可能性が指摘される。また、どちらの調査地でも近世末または明治初期頃の整地層の下位に地山となる砂層が広がり、近世中期以前の様相については明らかではない。家老職である戸倉家の一族は高政が佐伯に入部する以前からの家臣で、歴代の佐伯藩筆頭家老を担ってきた重臣である。戸倉家屋敷跡の調査では目立つ遺構は無いが、近世末の大規模な整地の痕跡や廃棄土坑が検出された。保田家屋敷跡での調査では、出土遺物から現時点では佐伯城下町で唯一の近世初期から中期の屋敷跡が検出された。

このように、佐伯城下町は番匠川河口に位置しいくつもの河川が市街地近くまで流れているので、水上交通の便には恵まれていた。現在では交通の主役は自動車であるが、自動車の普及以前は特に物資の移送には船が利用され、良好な漁場として知られるリアス海岸の浦々の水産資源を番匠川河口の佐伯市街地に集積し、全国各地へと出荷していた。また城下町として整備された際に内堀として取り込まれた小河川が市街地を流れており、市民も船をよく利用していた。さらに林業が盛んな山間部で伐採された木材も筏に組んで番匠川やその支流を下り、市街地で集積された後に各地へ出荷されたという。現在は市街地を流れる河川の幾つかは埋め立てられて道路となり、番匠川も水害対策のための河川改修によって流路が変更された。

明治16年（1883）に開港した佐伯港は前面に大入島を抱えるために波風穏やかな良港であり、戦前・戦後にかけての交通事情が悪かった時代、沿岸の各浦々や関西・四国を結ぶ定期船が運航していた。現在も大入島や市内の離島の間定期便がある。

【参考文献】

- 飯沼賢司 2007『海と山と古代の道』『図説海部・大野・竹田の歴史』郷土出版社
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2014『榑牟礼遺跡天神ノ下地区・榑牟礼遺跡掃木地区・曳地館跡・元越遺跡』
- 佐伯市史編さん委員会 1974『佐伯市史』
- 佐伯市教育委員会 2014『榑牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書2』
- 佐伯市教育委員会 1998『天祐館跡』
- 佐伯市教育委員会 2015『警露館跡』
- 佐伯市教育委員会 2016『佐伯城下町遺跡 戸倉家屋敷跡 保田家屋敷跡』
- 佐伯市教育委員会 2022a『佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書』
- 佐伯市教育委員会 2022b『佐伯城跡総合調査報告書』総論編



第1図 周辺遺跡地図 (S=1/50,000)

1. 佐伯城跡	2. 佐伯城下町	3. 白瀨遺跡	4. 萩山遺跡群
5. 宝剣山古墳	6. 女島山古墳群	7. 大友山砦跡	8. 瀬戸遺跡
9. 岡ノ谷古墳	10. 中山砦跡	11. 下城遺跡	12. 八幡山城跡
13. 長良貝塚	14. 上ノ台館跡	15. 上ノ台遺跡	16. 汐月遺跡
17. 宇山城跡	18. 元越遺跡	19. 長谷山際遺跡	20. 高城跡
21. 檜野古墳	22. 三上寺跡	23. 二上寺跡	24. 佐伯門前遺跡
25. 古市遺跡	26. 十三重塔	27. 木戸城跡	28. 曳地館跡
29. 梅牟礼遺跡	30. 梅牟礼城跡	31. 小田山城跡	32. 小田山館跡
33. 上小倉横穴群	34. 平城跡		



第2図 発掘調査地周辺地図 (S=1/5,000)



第3図 文政9年(1826)「御城下分見明細図絵」(部分・佐伯市歴史資料館所蔵)

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

(1) 調査区について

調査は、新道小路を挟んで東西2か所に調査区を分けて、西側を調査区A、東側を調査区Bとして実施した(第4図)。

調査区Aは、文政9年(1826)作成の「御城下分見明細図絵」(佐伯市歴史資料館所蔵)によると、松下家屋敷地にあたる。この段階では、絵図によると「松下盛左衛門 百四拾四坪」とある。

調査区Bは、文政9年の絵図では文字が擦れていたため屋敷地の所有者は判読できなかった。一方で大正4年(1915)に作成された、明治4年頃の城下の様子を表した「佐伯藩時代屋敷図」(佐伯市歴史資料館所蔵)によると、該当する地点に「浅澤典軒」との記載があることから、幕末までには浅沢家屋敷地になっていたことがわかる。

調査は調査区Aの620㎡、調査区Bの500㎡の範囲で行った。

調査の結果、調査区全体として調査直前まで区画内に市民が居住していたこともあり、改変が激しかった。しかし一部では、少ないながらも近世まで遡ると判断できる遺構を検出した。

松下家屋敷跡では、近代まで利用されていた井戸枠の石組を検出した。井戸の成立時期は、石組み内部に現在でも使われる硬貨が見つかったことから、近世まで遡ることはないと思われる。

また、井戸枠から西に延び調査区中央で南に大きくL字状に曲がる溝状遺構を検出した。井戸近くにあり遺構内に石列が一部見られることから、井戸とあわせて造られ、排水機能を持っていたと考えられる。遺構内からは、ほかの層から流れてきたと考えられる近世陶磁器が出土した。調査区中央からやや西側には石列が南北に伸び、石列を支える胴木を検出した。この石列は建物を支えていたと見られるが、成立時期が不明である。

近世に位置づけられる遺構としては、土坑が主体である。井戸石組みすぐ近くには瓦溜り土坑を検出した。

浅沢家屋敷跡では、松下家と同様に近代まで使用されていた井戸石組みのほか多数の土坑を検出したが、いずれも近代以降の遺物が出土した。

近世の遺構としては、蔵の基礎部分と考えられる石組みの土坑を検出した。

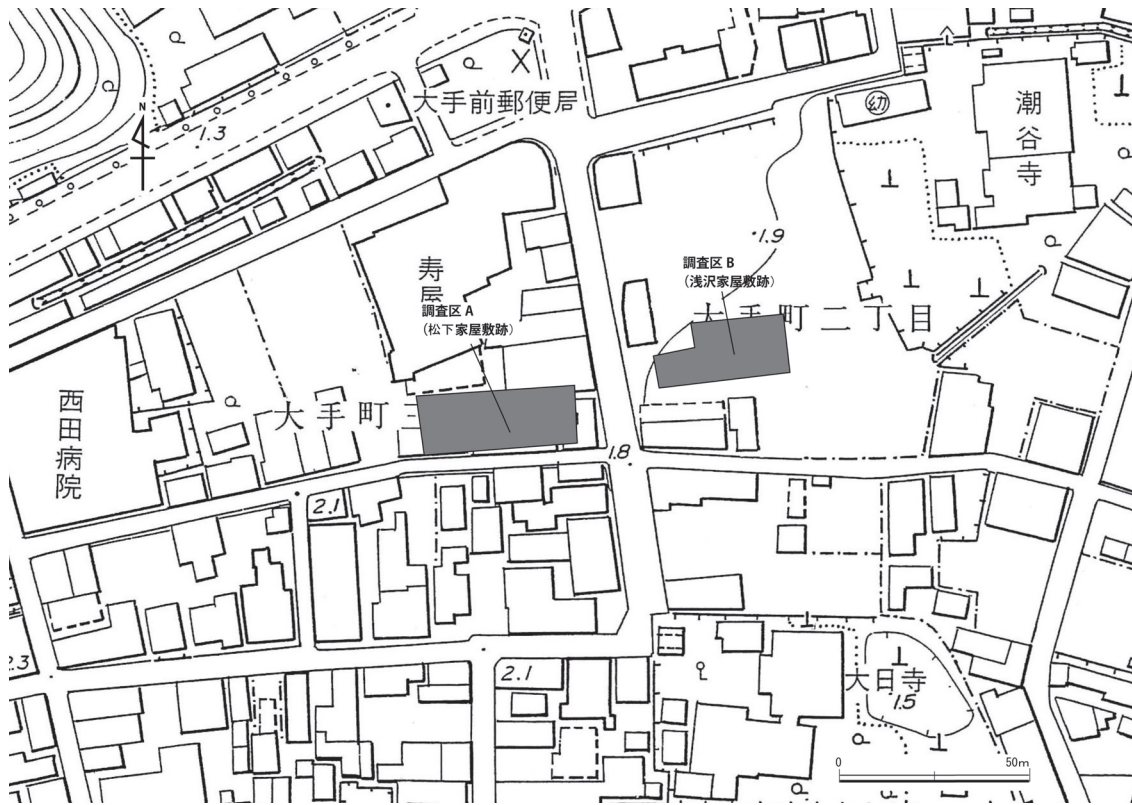
(2) 基本層序について

調査区の土層は合わせて26層あり、これを大きく4つに区分することができる(第5図)。

まずは、1現代整地層(I層)・2暗茶土層～8褐色土層が近代の整地層(II層)、そして9明褐色土層～24黄褐色土層が近世の整地層(III層)・最下層は地山である褐色土層で粘性なく砂質層(IV層)と区分した。どの層も粘性が弱く、I～IV層の各層の境目にあたる層は粘性がありしまりが強い。

III層のうち20層目にあたる暗茶色土層では、松下家屋敷跡の調査において瓦溜り土坑であるS80を検出した。

本報告書では、各調査区内の近世の遺構を取り上げるものとする。



第4図 調査区全体図 (S = 1/2,000)

1層	現代整地土
2層	暗茶褐色土 しまりやや強い・粘性弱い
3層	黄茶褐色土 しまり強い・粘性弱い
4層	暗褐灰色土 しまり強い・粘性やや強い
5層	褐灰色土 しまり、粘性やや強い
6層	暗灰褐色土 しまり、粘性やや強い
7層	暗灰褐色土 暗灰色土 しまりやや強い・粘性やや弱い
8層	褐灰色土 しまり、粘性強い
9層	明褐褐色土 しまり、粘性強い
10層	灰茶色土 しまりやや強い・粘性弱い
11層	灰色土 しまり、粘性やや強い
12層	暗褐色土 しまり、粘性やや弱い
13層	茶褐色土 しまりやや強い、粘性弱い
14層	茶褐色土 しまりやや強い・粘性弱い
15層	灰色土 しまり、粘性やや強い
16層	暗褐色土 しまり、粘性弱い
17層	黄灰色土 しまり、粘性弱い
18層	茶褐色土 しまりやや弱い、粘性弱い
19層	暗灰褐色土 しまりやや強い、粘性弱い
20層	暗茶色土 しまり、粘性やや弱い
21層	暗灰褐色土 しまり、粘性弱い
22層	明黄色土 しまり粘性弱い
23層	明黄色 しまり無・黄レキ混じる
24層	明黄色土 しまり粘性弱いと暗褐色土しまり強い・粘性が弱い瓦層
25層	茶褐色土 しまり粘性弱い
26層	褐灰色土 しまり粘性無・砂質土・地山

第5図 基本層序模式図

第2節 松下家屋敷跡の調査

(1) 遺構

(第6図)

土坑であるS66は、その底部に瓦片と陶片が混ざっていた。

S80は瓦溜り土坑である。内部には大量の瓦片と共に陶磁器片や五輪塔の一部（空輪・風輪）が混ざっていた。

(2) 遺物

(第7図)

S66から出土した1は18世紀後半以降に関西もしくは九州で生産されたものと考えられる陶器で器種は土瓶蓋、ロクロで成形している。

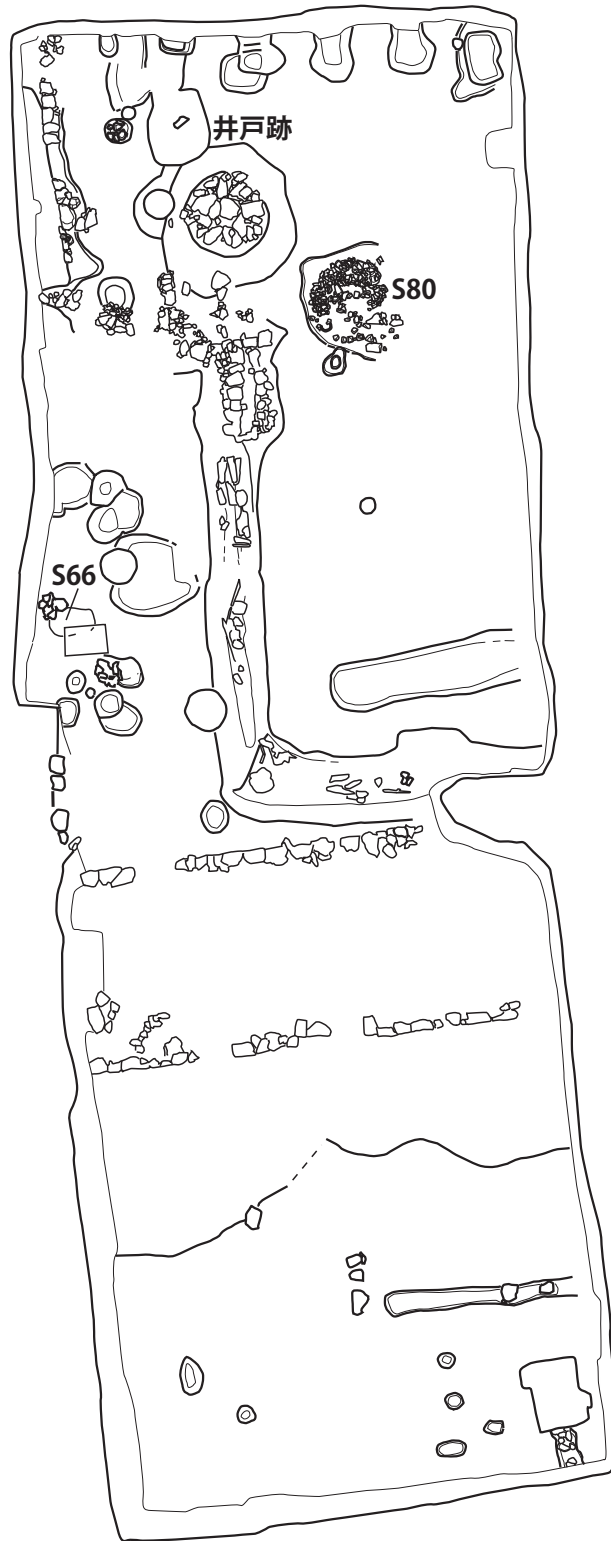
S80から出土した2は18世紀後半に肥前で生産された「くわらんか」と呼ばれる粗製の磁器碗である。口縁部の一部に被熱痕が見られる。胴には大小の丸が描かれ、小さいものはコンニャク印判によるものの可能性もある。3は、18世紀後半の肥前唐津系大皿と考えられる陶器で、胴から底部にかけて胎土が厚い。4は19世紀以降に萩で生産された陶器碗で、内面にはわら灰釉が施されている。

S80では、大量の瓦片が出土した。このうち、実測可能だったのは5～7である。

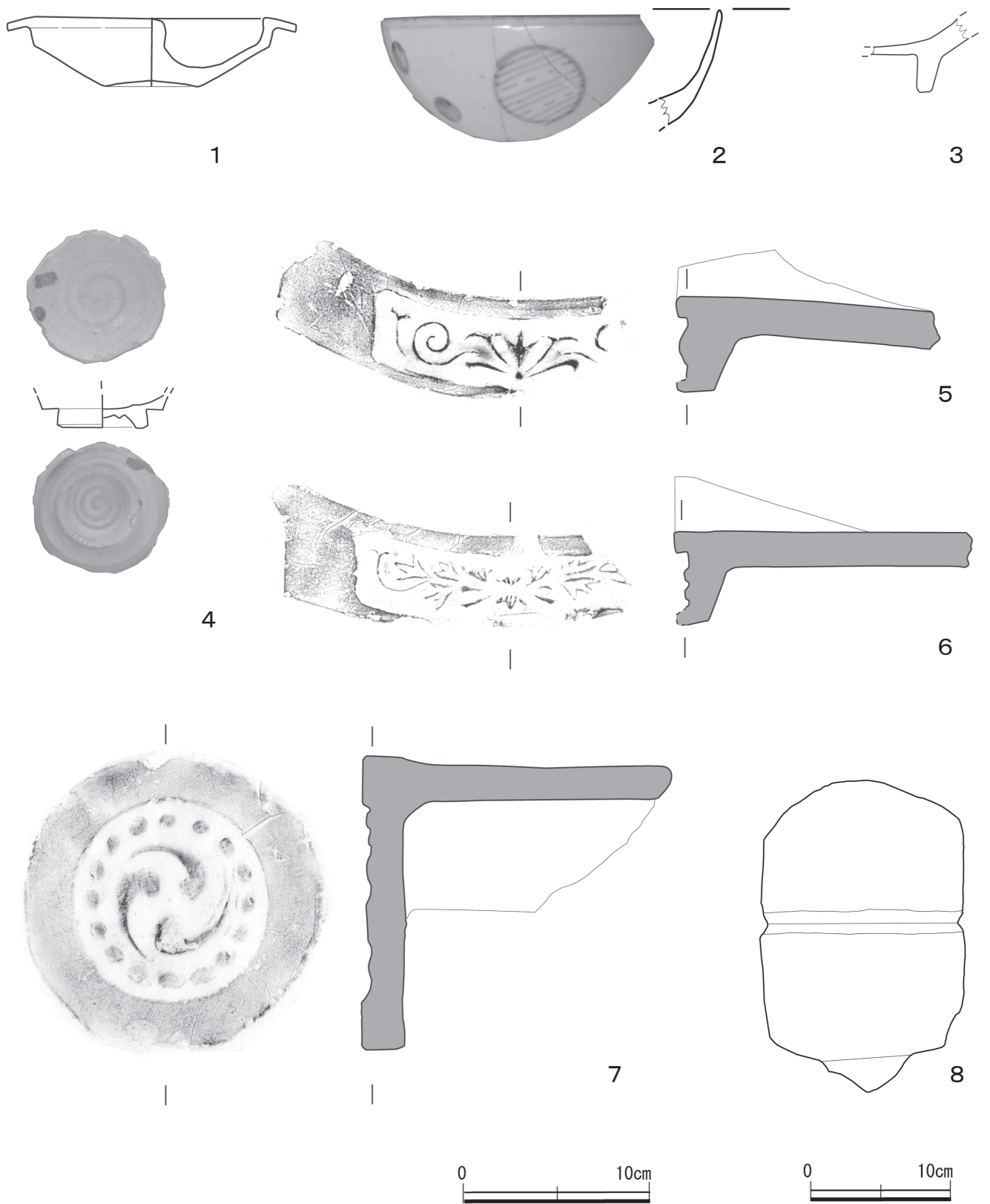
軒平瓦は文様から2種類に分けることができた。5は、橘を中心飾りに持ち周囲に均整唐草文様を持つ。6は、六状弁文を中心飾りに持ち周囲に均整唐草文様を持つ。また6の瓦の唐草文様の子葉は肉彫りで双葉を表している。

7は軒丸瓦で、瓦当径は14.5cm・長さ15.3cmで厚さは最大2.1cmである。文様は珠点が16点で、間隔が狭い。巴は左巻きで、頭は大きく尾が隣に続く巴の頭の所で終わって短い。

S80では、石造物も出土した。8は五輪塔の頂部で長さ22cm×直径14.5cmで、空輪と風輪が一体である。



第6図 松下家屋敷跡遺構配置図 (S = 1/200)



第7図 松下家屋敷跡出土遺物実測図 (S = 1 / 3)
 ただし、8はS = 1 / 4

記載 番号	出土 地点	種類	器種	法量 (cm)			文様				作成時期	産地	備 考
				口径	器高	底径	絵付け・釉薬	外面	内面	見込み			
1	S66	陶器	土瓶蓋	12.6	2.9	3.8	外面鉄釉				18C 後半～	関西か九州	
2	S80	磁器	碗	2.1 + a	4.6 + a		透明釉・染付	丸・点			18C 後半～	肥前	コンニャク印判
3	S80	陶器	皿	5.6 + a	4.2 + a	3.6 + a	内面に釉薬				18C 後半～	唐津?	肥前唐津系大皿
4	S80	陶器	碗			4.4	内面にわら灰 釉				19C～	萩	
5	S80	瓦	軒平瓦		7.0								中心飾り橘・均整唐草文様・ 胎土石英混ざる
6	S80	瓦	軒平瓦		7.4								中心飾り六弁花文・均整唐草 文様
7	S80	瓦	軒丸瓦	14.5									巴左巻き・珠点 16
8	S80	石造物	五輪塔	14.5	22.0								空輪・風輪・半分破損

第 1 表 松下家屋敷跡出土遺物観察表

第 3 節 浅沢家屋敷跡の調査

(1) 遺構

(第 8 図)

調査区中央よりやや北側にある S 1 は、東西 1.2m × 南北 1m の範囲の半地下式の石組み土坑で、土坑底部に方形の板状の石を敷き、その四方も板石で囲んで、その隙間を漆喰で埋めている。石列の材質は九州各地でよく見られる凝灰岩で、土坑の性格から土蔵の基礎部分と考えられる。

(2) 遺物

(第 9 図・第 10 図)

S 1 出土の 1 は、18 世紀の肥前で作られた磁器碗である。外面には二重圏線と内面に見込みが蛇目と二重圏線が見られる。蛇目には、作成時に付着した砂地目がある。

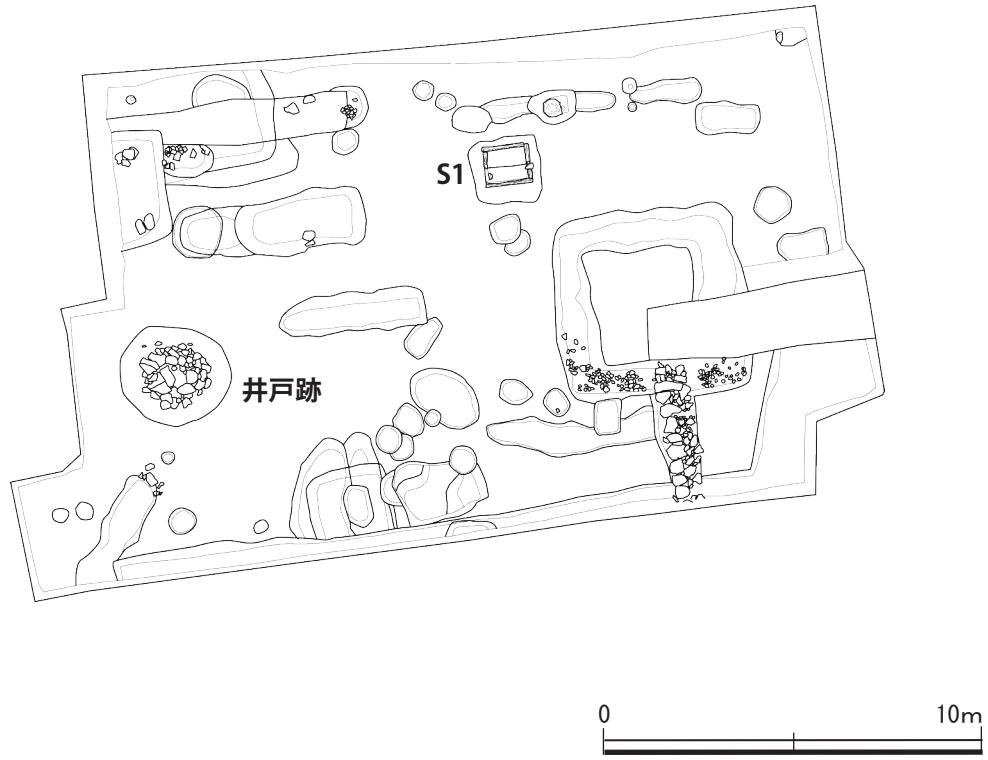
S 2 の出土遺物は 2～3 である。2 は、18 世紀後半に関西で作られた陶器蓋で、外面に飛びカンナと蔓草の文様が施されている。内面には鉄釉が施されている。3 は 18 世紀中頃以降の製造と考えられる肥前系磁器碗で、文様は、外面に唐草文様、内面に四方嚢、見込みは荒磯と見られる。

S 8 出土の 4 は、金属製品で鏝である。

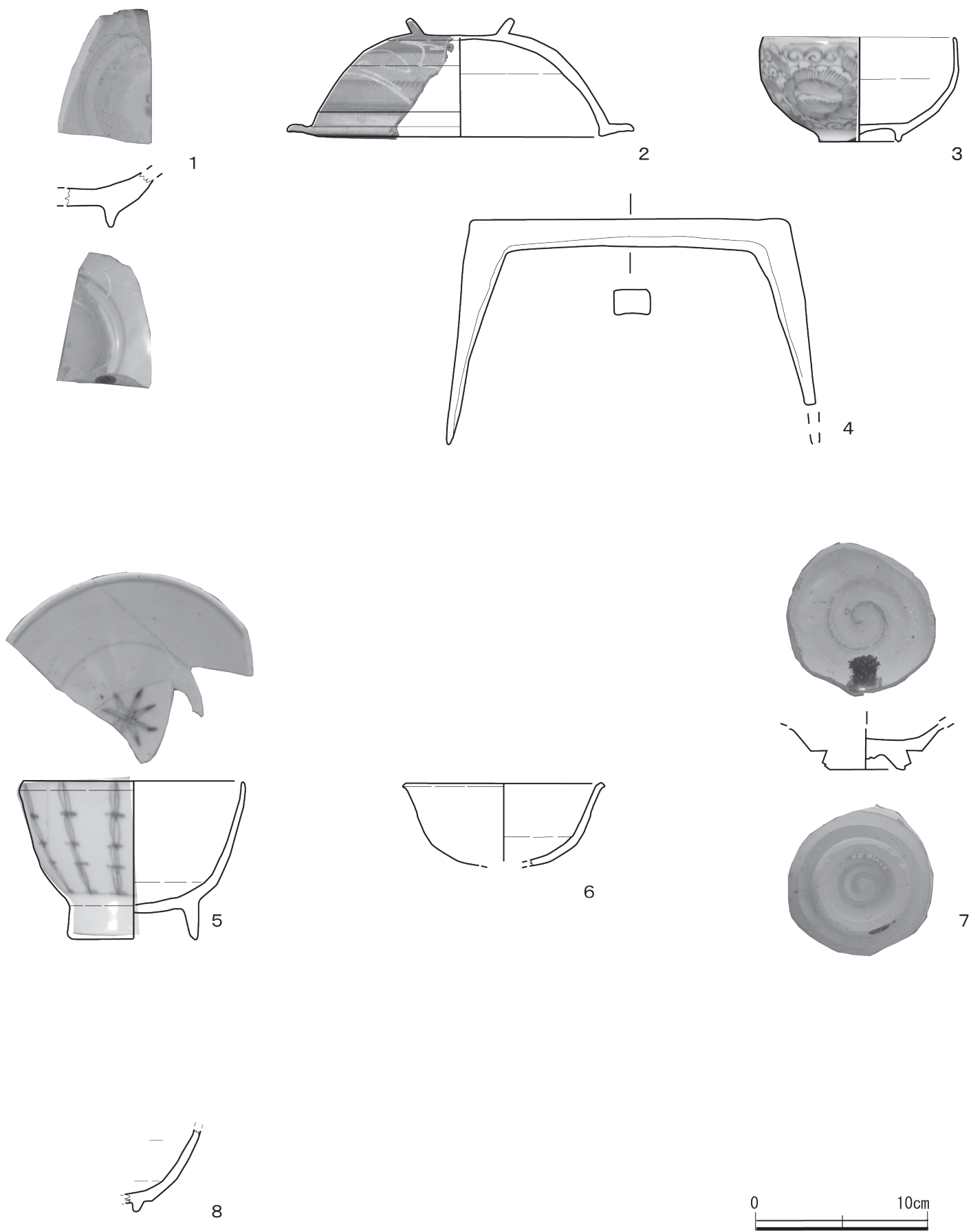
S 9 からの出土遺物は 5～8 である。5 は 18 世紀後半製造と考えられる肥前の広東形碗で見込みが八弁花である。6 は、18 世紀後半と考えられる関西または信楽の磁器碗で全体が灰釉である。7 は、19 世紀以降に萩で作られた陶器碗で内面にはわら灰釉が施されている。8 は、18 世紀後半以降の関西で作られた露胎の陶器で小形碗と考えられる。

S 11 からの出土遺物は 9～10 である。9 は、18 世紀後半に堺で生産されたと考えられる陶製挿鉢片である。10 は 18 世紀中頃の肥前系の瓶と思われる磁器で、外面に二重圏線がある。

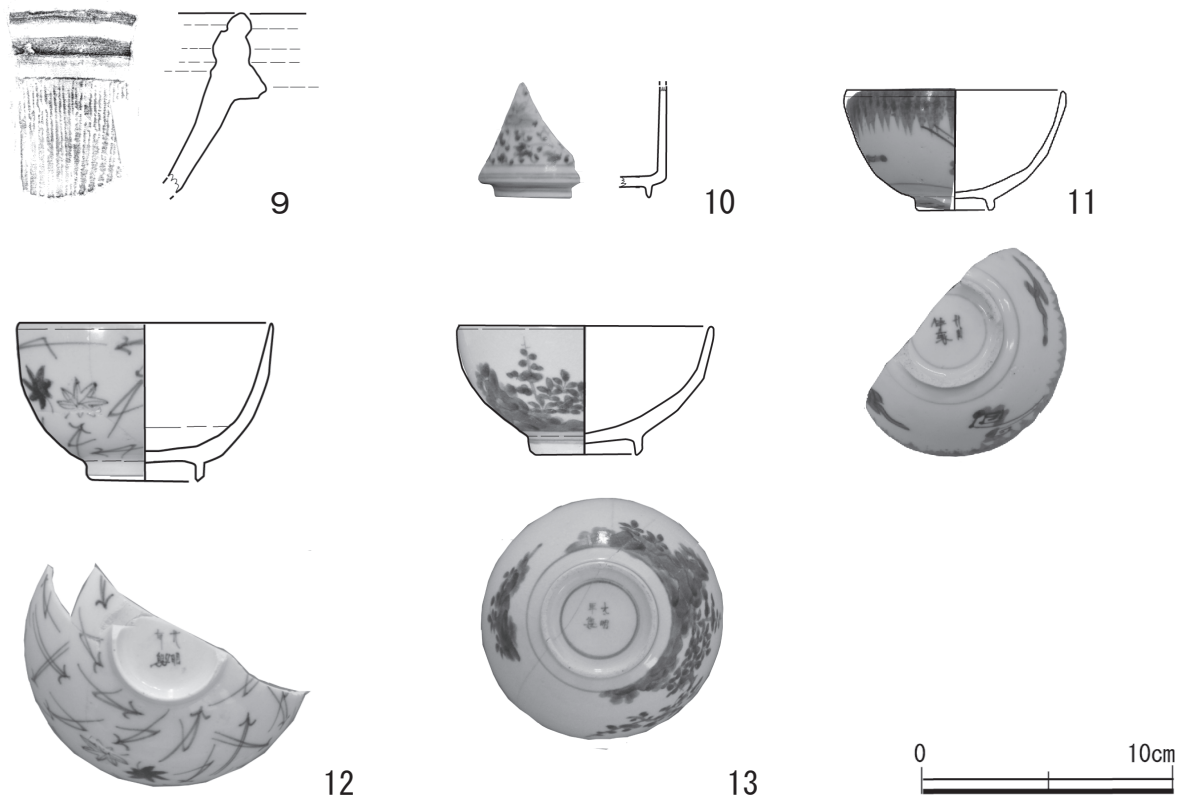
S 28 からの出土遺物は 11～13 である。11 は 18 世紀前半～中頃の肥前磁器碗で底部に一重圏線と「大明年製」の銘がある。12 は 18 世紀前半の肥前磁器碗で底部に一重圏線と「大明年製」の銘がある。文様は植物で一重圏線が見られる。13 も 18 世紀前半の肥前磁器碗で底部に「大明年製」の銘が見られる。



第8図 浅沢家屋敷跡遺構配置図 (S = 1/200)



第9図 浅沢家屋敷跡出土遺物実測図① (S = 1/ 3)



第 10 図 浅沢家屋敷跡出土遺物実測図② (S = 1 / 3)

記載 番号	出土 地点	種類	器種	法量 (cm)			文様				作成時期	産地	備 考
				口径	器高	底径	絵付け・釉薬	外面	内面	見込み			
1	S1	磁器	碗			2.1 +	透明釉・染付	二重圏線	二重圏線	蛇目	18C	肥前	見込みに砂地目が付着
2	S2	陶器	鍋蓋	14.9	5.2		内面鉄釉	飛びカンナ・ 菱草			18C 後半	関西	
3	S2	磁器	碗	8.6	4.5	3.4	透明釉・染付	唐草・牡丹	四方櫛	荒磯?	19C ~	肥前	
4	S8	鉄製品	鏝	1.0									長さ 19.8cm・幅 15.9cm
5	S9	磁器	碗	9.8	5.9	5.6	透明釉・染付	不明		八花卉	18C 後半	肥前	広東形碗
6	S9	磁器	碗	8.8	3.6 + a		灰釉				18C 後半~	関西か信楽	
7	S9	陶器	碗		2.1 + a	3.8	わら灰釉・鉄 釉				19C ~	萩	萩・19C ~
8	S9	陶器	碗		3.7 + a		透明釉				18C 後半~	関西	露胎・小杉碗
9	S11	陶器	搦鉢		7.0 + a						18C 後半	堺	堺・18C 後半
10	S11	磁器	瓶?		4.5 + a		透明釉・染付	草花・二重 圏線			18C 中~	肥前	肥前系
11	S28	磁器	碗	8.6	5.3	4	透明釉・染付	雨降・雲か・ 一重圏線			18C 前半~中	肥前	銘「大明年製」
12	S28	磁器	碗	10.0	5.0	4.4	透明釉・染付	紅葉・草花・ 一重圏線			18C 前半	肥前	銘「大明年製」
13	S28	磁器	碗	10.0	5.4	3.6	透明釉・染付	松・草			18C 前半	肥前	銘「大明年製」

第 2 表 浅沢家屋敷跡出土遺物観察表

第4節 調査のまとめ

調査では、検出した遺構の大半が近代以降の改変の痕跡と見られる。

松下・浅沢両家屋敷跡には、それぞれ井戸枠と、松下家では井戸から屋敷地外へ排水するためと思われる溝状遺構を検出した。しかし、枠内に現代で使われる硬貨が見つかった。また、一部にはコンクリートが張られていたこともあり、由来は近世まで遡る可能性もあるが、近代まで使用されたと考えるとかなりの改変を受けていると思われる。

近世の遺構として、どの調査区も土坑が主体であった。

松下家屋敷跡にあたる調査A区の調査では、瓦溜り土坑を検出した（S80）。一方で浅沢家屋敷跡にあたる調査B区では、蔵跡と考えられる半地下式の石組みの坑を検出した（S1）。この遺構内では遺物がほとんど出土していない。

出土遺物は松下家屋敷跡の調査区では18世紀後半の陶磁器が大半であった。

浅沢家屋敷跡の調査区では出土した遺物の大半は18世紀中頃から後期製造の陶磁器であるほか、一部には18世紀前半まで遡る磁器も出土した。

【参考文献】

- 大分県教育委員会 1993 『府内城三ノ丸遺跡』
- 佐伯市教育委員会 1998 『天祐館跡』
- 佐伯市教育委員会 2013 『佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡』
- 佐伯市教育委員会 2015 『警露館跡』
- 佐伯市教育委員会 2016 『佐伯城下町遺跡 戸倉家屋敷跡 保田家屋敷跡』

第3章 まとめ

第1節 屋敷地の変遷

今回の発掘調査の成果をまとめるにあたり、まずは調査対象となった屋敷地の変遷を改めて整理したい（第11図A～C）。

居住者が確認できる最も古い絵図である元文3年（1738）作成の「御城并御城下絵図」（佐伯市歴史資料館所蔵）によると、新道を挟んで西側の調査区（調査区A：のちの松下家屋敷）は、上級武士である黒木家屋敷の敷地の一画であり、この時点では個別の屋敷地としては存在しない（第11図A）。一方で東側調査区（調査区B：のちの浅沢家屋敷）は同絵図に屋敷地割が見られるものの、無記名である。

文献史料によれば、元文元年（1736）9月11日に発生した、焼失軒数337軒もの被害を及ぼした大火では、本町居住の浅沢伝左衛門宅が火元である（佐伯藩史料『温故知新録』六、p312）ことから、浅沢家は元文段階においては新道沿いではなく、本町に居住していた可能性がある。同史料によると浅沢伝左衛門は、火災後に藩から謹慎を申し付けられたが、同月中には無罪となって復帰している。このことから、元文3年時点では新道の東側調査区には浅沢家以外の者が居住していた可能性が高い。

時期が下った文政9年（1826）作成の「御城下分見明細図絵」（佐伯市歴史資料館所蔵）によると、黒木家が入っていた屋敷地には西名家が入り、その屋敷地を分割する形で松下家屋敷が成立している（第11図B）。

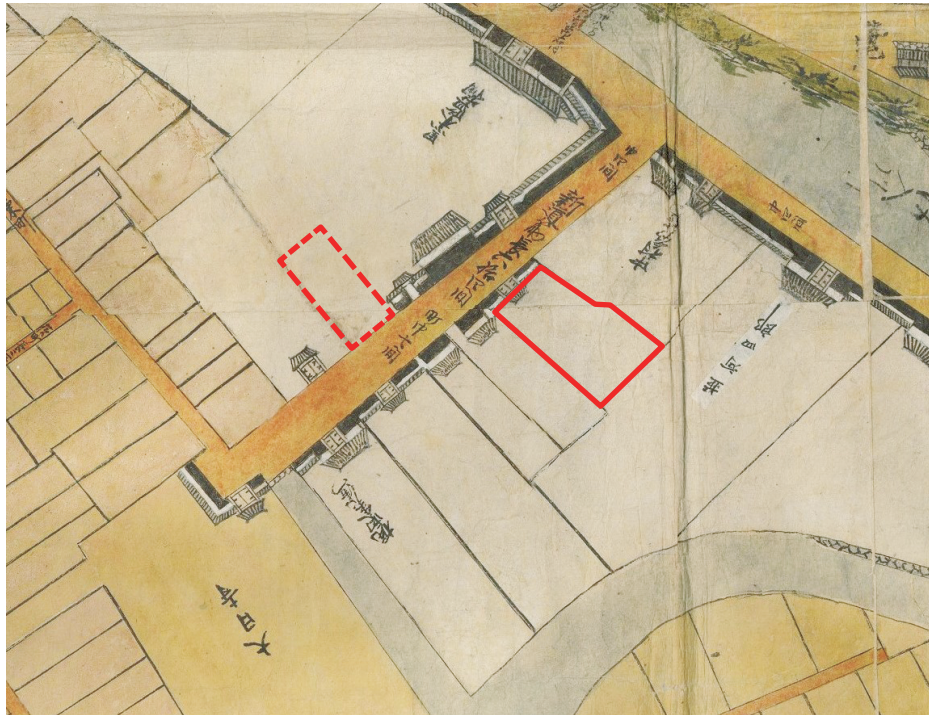
新道の東側の屋敷地には、本絵図では居住者名が記載されているが、シワのため字が擦れて読み取りづらい。そこで、さらに時期の下った大正4年（1915）に明治4年（1871）頃の城下町を復元して描いた「佐伯藩時代屋敷図」（佐伯市歴史資料館所蔵）を参照すると、この屋敷地には浅沢家が入っている（第11図C）。そのうえで文政9年の絵図を見ると、判読可能な文字の一部から浅沢と読むことも可能であると判断した。このことから間接的にはあるが、調査区から離れた本町に居住していた浅沢家が、文政9年までには新道の東側の屋敷地に移転していたと推測できよう。（ただし、浅沢姓を名乗る藩士が複数存在していた可能性や、文政9年から明治4年までの間に転居した可能性もあり、さらなる検証が必要ではある。）

このような居住者以外の変更点として、文政9年の絵図では、松下家屋敷地と浅沢家屋敷地の間にあった新道小路を東西に貫く形で、道（新小路）が新規に開通している。この新小路を作るにあたって、元文段階で黒木家と梶西家それぞれの屋敷地の南に接していた屋敷地を潰していることが、元文3年・文政9年の両絵図の比較から読み取れる。

この町割りの改変の背景としては、城下で発生した火災からの復興があると考えられる。

佐伯城下町は、近世全般にわたって幾度も火災に見舞われた。特に、元文から文政にかけて最も大きな被害を出したのは、宝暦14年（明和元年、1764）正月10日夜に発生した火災である。火元は両屋敷地近くの船頭町で、被害は記録によると「船頭町御家人・町家悉く焼失」（「郡方町方御用日記」佐伯藩政史料D-IV-50所収）とあるように、極めて大きいものだった。同史料によると、発生して間もない同月24日には「御家人と町家入交り、混雑致し町並も宜しからず」という理由で「町並御直し」が藩から命じられた。

新小路の開通は、この武家地と町人地を区分するための城下町再編の一環として行われたと考えられる。宝暦14年以降の城下町再編の過程で、文政9年までに松下家屋敷地の成立や浅沢家の転居が行われたのであろう。



第11図A 元文3年（1738）作成「御城并御城下絵図」（佐伯市歴史資料館所蔵）



第11図B 文政9年（1826）作成「御城下分見明細図絵」（佐伯市歴史資料館所蔵）



第11図C 明治4年（1871）頃「佐伯藩時代屋敷図」（佐伯市歴史資料館所蔵）

第2節 総括

出土遺物については、松下家屋敷跡の調査ではまとまった量の一括廃棄の痕跡とみられる瓦溜り土坑（S80）に注目したい。土坑内からは18世紀後半から19世紀に由来する陶磁器とともに、多量に出土した軒平瓦は文様から2種類に分類できる（第12図）。






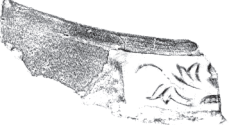
1つは、橋の中心飾りと周囲の均整唐草文様が特徴で、17世紀末から19世紀にかけて佐伯でも生産された大坂系軒平瓦である。大分県教育委員会がまとめた調査報告書である『府内城三ノ丸遺跡』掲載の編年と比較すると、S80出土の大坂系の平瓦は製造年代が18世紀後半に比定されるF-1～2類に類似する（大分県教委1993）。

もう1つは六花卉文を中心飾りにもち、周囲が均整唐草文様となることが特徴で、江戸時代後期から現在の大分市東部で生産され、幕末以降豊後国内で広く流通していた細系軒平瓦である。府内城三ノ丸遺跡での報告書掲載の編年と比較すると、S80で出土した瓦は中心飾りや均整唐草文様の配置から、製造年代が18世紀後半に比定されるG-1類と、19世紀前半から後半に比定されるG-2類の中間と位置付けできる（大分県教委1993）。

このうちS80から出土した大坂系軒平瓦は、府内城三ノ丸遺跡でF-2類と分類される瓦と比較すると、第2唐草文様の子葉が小型化していることがわかる。

また細系軒平瓦もG-1類にあたる第2唐草文様の子葉と比べて、S80出土の瓦では小型化し、向きもG-1類では第1唐草文様に向いているのに対し、まっすぐ伸びていることがわかる。

つまりS80出土の軒平瓦の製造年代は、2種類とも18世紀後半～19世紀前半に収まるといえる。

18 世紀 後半	大坂系軒平瓦	細系軒平瓦
	 府内城 F-2 類	 府内城 G-1 類
	 S80 出土 (第7図の5)	 S80 出土 (第7図の6)
19 世紀 前半		 府内城 G-2 類
中頃		 佐伯城跡二の丸表採
		0 10cm

典拠

府内城跡出土瓦は大分県教育委員会 1993 『府内城三ノ丸遺跡』

佐伯城跡出土瓦は佐伯市教育委員会 2022 『佐伯城跡総合調査報告書』 総論編

第12図 S80出土軒平瓦分類表 (S= 1 / 4)

このように、S80の遺物は陶磁器や瓦類に関しては大きな時期差は見られない。おそらくは19世紀前半の一括廃棄によるものと考えられる。廃棄の理由としては、土坑内に焼土の混入がなく、遺物にも被熱痕が見られないことから、火災処理土坑とは考え難い。火災以外の理由での屋敷などの建て直しを考えるべきであろう。

浅沢家屋敷跡の調査では、土坑中に多量の陶磁器類が出土した。遺物の生産時期は松下家屋敷跡と同様に18世紀代に収まる。一方で、18世紀後半以降の遺物が多い松下家屋敷跡と比較して、浅沢家屋敷跡ではそれより時期が遡る18世紀前半～中頃製造の陶磁器類が多い。

遺構の面では、半地下式で石組みが箱状に組み込まれていたS1は、当初は地下蔵かと想定して調査を行った。しかし、遺構内からの出土遺物は少なく、また蔵であれば通常は存在するはずの、石組みを覆う建物の基礎となる石列や柱穴が土坑の周りから検出されなかった。S1の遺構がどのような性格を持っているのかは、今後の検討を要する。

次に、屋敷地の変遷と調査地の整地層の関係について考えてみたい。宝暦14年(1764)の火災は、全焼まで至らないまでも今回の調査地周辺にあった梶西・佐久間・黒木など上級武士の屋敷

も被災しており（「郡方町方御用日記」佐伯藩政史料D-IV-50所収）、これらに隣接している屋敷も被災したであろう。しかし、今回の調査では火災に伴う焼土層が観察されなかった。

焼土層は、これまでに調査地周辺で行われた試掘・確認調査においても、屋敷地内の広範囲に広がっているものは確認されていない。一方で、整地層中には被熱痕のある陶磁器が出土する事例もみられる。このことから、佐伯城下町においては火災後の復興をするにあたって、屋敷地の土を広範囲・大規模に入れ替えている可能性がある。

これらの屋敷地の変遷と一括廃棄の背景を考え合わせると、以下のようになる。

松下家屋敷跡の場合、調査では火災に伴う焼土層が検出されなかった。S80を中心に18世紀後半を主体とする遺物が出土し、18世紀前半以前のもの出土していない。また前節で整理したとおり、松下家は概ね1760年代以降に行われた、宝暦の火災を契機とする城下町再編とそれに伴う新小路の開設によって屋敷地が成立し、移り住んだと推定できる。そして、18世紀後半頃の屋敷内の建物の建て替えなどを理由にS80が形成されたと考えたい。ただし松下家屋敷地の正確な成立時期については、整地層中に遺物が出土していないため判然としない。

浅沢家屋敷跡の調査では、18世紀中頃から後期にかけての遺物が出土し、18世紀初頭以前の遺物は出土していない。前節の整理によれば、浅沢家がこの屋敷地に移転したのは元文年間（1736～40）から文政9年（1826）までの間の可能性がある。そしてこの間、1760年代以降からは城下町の再編が行われている。浅沢家の移転もこの再編の一環であり、移転時に屋敷地の整地も行われたと仮定すれば、18世紀初頭以前の遺物が無く、18世紀中頃から後期までの遺物が出土する状況とも大きな矛盾はない。

このように一部に仮定を含んではいるものの、今回の発掘調査の成果は、宝暦14年に始まる大掛かりな城下町再編の一端として、松下家屋敷地の成立や浅沢家の移転の経緯を明らかにしたものと言える。

【参考文献】

- 大分県教育委員会1993『府内城三ノ丸遺跡』
- 佐伯市教育委員会2005『佐伯藩史料 温故知新録』六
- 佐伯市教育委員会2022『佐伯城跡総合調査報告書』総論編



松下家屋敷跡遠景（北から）



松下家屋敷跡近景（南から）

遺構図版2



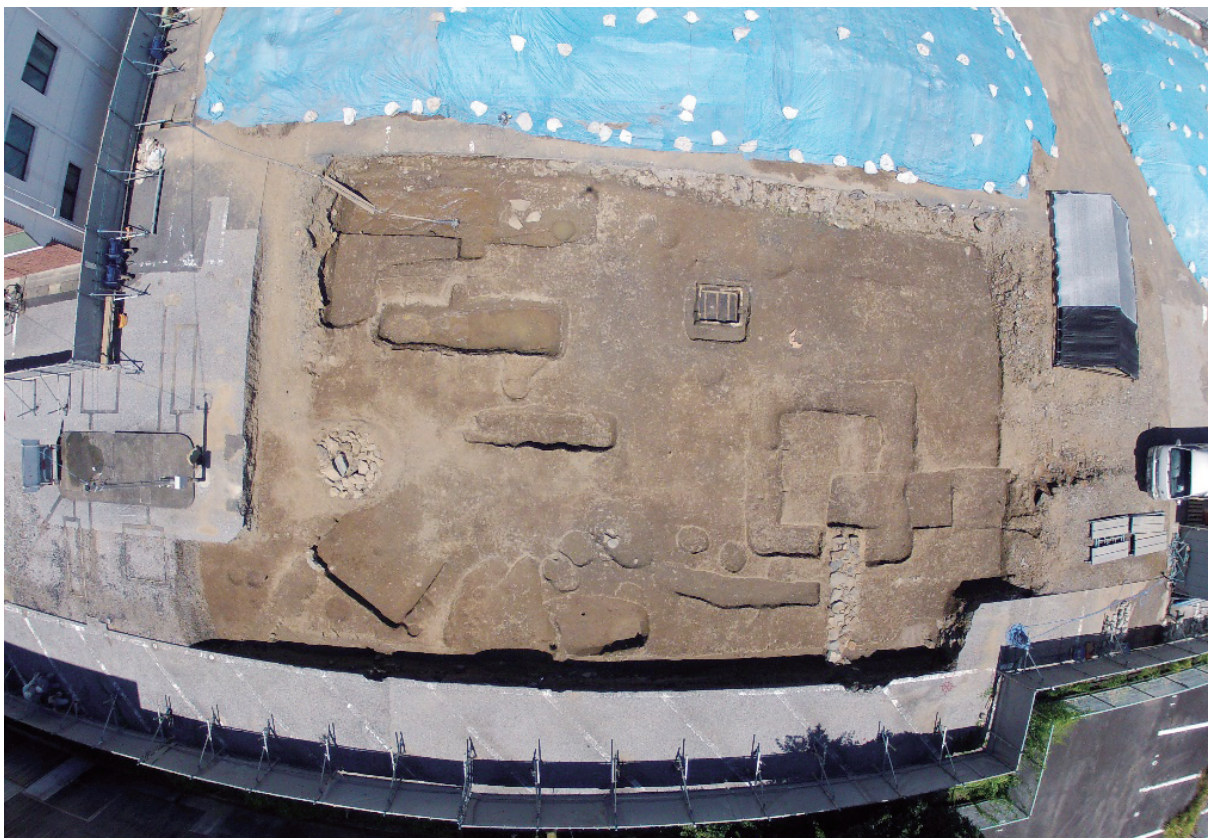
S80 検出状況（東から）



松下家屋敷跡出土遺物（第7図）



浅沢家屋敷跡遠景（西から）



浅沢家屋敷跡近景（南から）

遺構図版 4



S1検出状況（南から）



浅沢家屋敷跡出土遺物（第9・10図）

報告書抄録

ふりがな	さいきじょうかまちいせき まつしたけやしきあと・あさざわけやしきあと
書名	佐伯城下町遺跡 松下家屋敷跡・浅沢家屋敷跡
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編著者名	福永 素久
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0831 大分県佐伯市大手町1丁目2番25号（佐伯市歴史資料館内）
発行年月日	2023年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町	おおいたけんさいきし 大分県佐伯市 おおてまち 大手町138番地1、144番地1	44205	205012	32° 57' 27"	131° 53' 39"	20110220～ 20120919	1,120㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町	城下町	近世・近代	柱穴・廃棄土坑ほか	陶磁器・瓦・金属製品・石造物	近世中～末頃の屋敷跡

佐伯市文化財調査報告書 第13集

佐伯城下町遺跡

松下家屋敷跡

浅沢家屋敷跡

平成23・24年度大手前再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2023年3月31日

発行 佐伯市教育委員会

〒876-0853 大分県佐伯市大手町1丁目2番25号
(佐伯市歴史資料館内)

TEL 0972(22)4234 FAX 0972(22)0701

印刷 元屋印刷株式会社

〒876-0811 大分県佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL 0972(24)0900 FAX 0972(23)2420

